



Title	貧困を再理解する : インドネシア、西ティモールの 廃品回収人の民族誌
Author(s)	森田, 良成
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57710
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文につい て 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	もり 森	た 田	よし 良	なり 成
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)			
学位記番号	第 23512 号			
学位授与年月日	平成22年3月23日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻			
学位論文名	貧困を再理解する—インドネシア、西ティモールの廃品回収人の民族誌			
論文審査委員	(主査) 教授 中川 敏			
	(副査) 教授 春日 直樹	教授 栗本 英世	講師 森田 敦郎	

論文内容の要旨

本論文の目的は、人類学的フィールドワークと民族誌記述を用いて、貧困を再理解することにある。これまで人類学は、貧困の問題が指摘されるような世界のもっとも近くでもっとも長期に及ぶ調査と研究を行っていながら、貧困を直接論じることがほとんどなかった。それは、人類学による経済の議論が、いわゆる未開の経済の、貧困という言葉が意味をもちうる資本主義の体系とは異質な体系を描くことを主眼とし、近代社会が自明視する経済合理性を相対化することに本領を発揮してきたからだった。しかし、人や物や情報がこれまでにない規模と速度で世界をめぐる時代にあつて、異質な未開の経済のすばらしさを発見しそれを賞賛するだけの主張は、凡庸であるか不可能である。また人類学の議論のあり方としても、ある社会や文化における個別の具体的な生活世界を、その内部で完結し自足したものと論じるのではなく、より大規模で匿名的な政治経済との関係において理解する必要がある。自らがもつ以上の財を投げ打ってまで気前のよさを示し、蕩尽を繰り返す人々は、その一方で商品に囲まれたより豊かな生活への願望をもち、思うようにいかない自らの生活をかこちもする。そのような彼らの現在は、貧困の苦難とはまったく無縁の未開世界のものではないが、一定の望ましい水準に到達していないことを示す指標の積み重ねで想像される貧困とも一致しない。それは物の価値や行為の意味が揺らぐ未確定の現在として、民族誌記述によってとらえる必要がある。

本論文では、インドネシアで最も開発が遅れた地域ともされる西ティモールにおいて、丘陵地の農村と、出稼ぎ先の都市クバンとを往復する廃品回収人（アナ・ボトル）たちの生活を描いた。

アナ・ボトルたちは、粗末な荷車を押してクバンの町を歩き、空き瓶や各種の金属スクラップを、買取ったり拾ったりして集めて回る。廃品は、ジャワ人の親方によって買い取られ、コンテナ船で海路を工業都市スラバヤまで運ばれていく。そして現地の仲介者の手を経て、工場で資源として再利用され、新しい製品の一部となり、再び国の内外へ散っていく。

アナ・ボトルたちの生活は、町と村を往復しながら営まれる。町における、成果を偶然に委ねた「非効率的」な廃品回収の重労働は、売買の経済と贈与の経済の2つの理をずれたままつなげている。仕事のルートが重なるままにし、成果を偶然に任せる結果として、廃品回収にはより多くの出稼ぎ人が参入し、そこから収入を得ることが可能になる。一方で、町の経済成長に伴う廃品の量の増加分を、アナ・ボトルの人数の増加が大きく上回ってしまうと、彼ら1人1人が得られる稼ぎは制限され、その仕事をますます効率性を無視した偶然任せのものにしていく。

アナ・ボトルたちが稼いだ現金は、村に持ち帰られ、饗宴につき込まれる。稼ぎをそこで気前良く投げ打つ者が、一人前の社会の成員として認められる。饗宴を通して、人々の間で互酬性が確認され、そこに参加する個人や集団の誇りが保たれる。ただし同時に、それまでの町での重労働によっていくらかは近くに引き寄せつつあったかもしれない、資本を蓄え増やすこと、より規模が大きく効率的に稼げる仕事へ移行すること、セメント作りの家やバイクといった彼らがたしかに求めている財を獲得することなどが、饗宴のたびに遠ざかる。アナ・ボトルたちは、自らのそうした生活にただ満足しているわけではなく、時にははつきりと不満を口にしますが、それでも饗宴のために稼ぎをつぎ込むことはやめない。

仕事の成果を偶然に任せるしかないアナ・ボトルたちにおいて、例外的に安定した高い稼ぎを誇る者がいる。しかしこの成功の事例は、特定の説明のなかに回収されて一般化されることがなく宙吊りのままになっている。そのため、他の者たちがそれに追従することはできず、またそうするように促されることもない。彼が自分の荷車につき込む労働と時間は、他のアナ・ボトルたちによって、稼ぎを確実にするための周到な下準備として評価されたり、勤勉さといった彼の人格的な美点として批評されたりすることなく、ただ謎に満ちたおびただしい浪費としてみなされる。

アナ・ボトルたちは、その偶然任せの仕事に必要なものとして、「歩くこと」と「勇敢であること」をあげる。行った先で廃品が得られるかどうかはわからないし、そこで何らかの危険に遭遇することが完全には回避しきれない。それを知りつつも、稼ぎを得るためではなく、稼ぎを得る可能性を得るために、彼らは歩き続ける。彼らはあるとき、ポストに対して抗議の行動を起こしたが、それは具体的などのような成果にも至れずに終わった。抗議の行動は、一見したところ、ただの迷走と挫折にしか見えないものだったが、その後には断片的だが痛快な物語が彼らに残された。それは一連の抗議の行動において、未来における成果と失敗を問う方がないまま、未確定の現在で賭けに出る「最初の勇氣」がたしかに発揮されていたからだった。

アナ・ボトルたちが、村でバスやトラックの荷台に乗り込む。村は、ただ1本の道でクバンとつながっている。だがその道はクバンに至ると、そこからさらにどこかへと向かう明確な方向を失う。クバンという大都会に至った道は、そこでいくつにも枝分かれし、複雑に入り組み、循環したり、行き止まったりする。クバンからさらに向こうには、海に隔てられたほとんどただ名前を知っているだけの非場所的な世界が、ほとんど同じような速さで茫漠と広がっている。アナ・ボトルたちの間で、そうした新天地を目指す話がしばしば突然わき起こり、急速に盛り上がり、やがて消える。

以上のようなアナ・ボトルたちが生きる現在は、条里空間と平滑空間の概念を用いることで再理解することができる。

条里空間においては、特定の結果をもたらす行動が可能であり、ゆえにまたそれを行うことが必要とされる。そうした条里空間と、個人が世界に読み込んでそこに重ねている条里空間がずれるとき、あるいは条里を見出せないまま、個人が習慣化している行動を頼りにそこを平滑空間として生きるときに、個人の意図の有無とは関係なく「合理的」な行動が不可能になる。大規模で匿名的な政治経済システムとの関係における個人の貧困の苦難は、このような苦難としてとらえることができる。条里空間と平滑空間は、単純な二項対立の関係にある概念ではなく、町と村のそれぞれを、単純に条里空間か平滑空間のどちらかとして設定することはできない。そうではなく、町と村の違いは、それぞれの条里空間のずれと、そのそれぞれが繰り返す平滑空間との衝突や移行や重なり合いにおける違いである。

アナ・ボトルたちの現在は、町の条里空間のみに留まり、クバンからさらに外へ出て行くあらゆる道を閉ざされたまま、苦難にただ耐えるというものではない。また、村での条里空間のみで完結した生活に自足する「貧しいながらも明るい笑顔を忘れない人々」という月並みな言葉でとらえられるものでもない。町と村のそれぞれにおいて条里空間が裂け、平滑空間が現れるとき、生成されつつあるものに開かれた未確定の現在を生きることが必要になる。そうした場面において、彼らはまだどこにも行きようのないところで、どこかへ行く希望を抱き続ける。

暫定的で未決定なものとして開かれている彼らの現在は、意味が確定しているさまざまな指標や、一定の基準を満たしていない数値をいくらか増やしてみても、そうしたものの組み合わせから再現することができない。彼らの現在は、何らかの機会に行き当たりさえすれば、どの部分からでも異質な世界へと

すぐさまつながり、順序や予測など関係なくただちに大きく動き出す潜在性をもっている。ただし、そうした変化をもたらす出来事は、まだ起きてはいない。

論文審査の結果の要旨

本論文は東インドネシア、チモール島西部、クバンという中規模都市における廃品回収業者、とりわけ「アナ・ボトル」（瓶の子供達）と呼ばれる村からの出稼ぎの人々の民族誌です。

舞台となるクバンは、植民地時代の歴史的経緯から、チモールの人々（アトニ）以外の人々の多く住む都会です。アナ・ボトルたちは、チモールの住民でありながら、クバンにおいて、町の住人たちからしばしば「山の人」と呼ばれ、差別の対象ともなってきました。そして、彼らアナ・ボトルたちは、クバンという都会においてまぎれもなく貧困を生活している人々です。同時に、彼らはクバンからはバス一本で通うことのできる生まれ故郷の村では、「饗宴」「贈与交換」を典型例として挙げることのできる、言わゆる「伝統的」な経済に生活している人々です。

人類学は、これまでこのような状況、大雑把に言えば「伝統」と「近代」が直面するような状況を分析するためのさまざまな装置を作り上げてきました。たとえばモラルエコノミーと市場経済、社会に埋め込まれた経済と社会から離床した経済などなどです。森田さんは、これらの理論に通暁しながらも、クバンのアナ・ボトルの状況を、それらの理論に単純に当て嵌めることを拒んでいきます。例えば、彼はアナボトルたちとともに村に赴き、そこが決してアナボトルたちの言うような理想郷ではなく、資本主義に大きく影響されていることを紹介します。同時に、クバンという町がすべて資本主義的経済だけで動いているわけでもありません。

森田さんは真面目な民族誌家として、村から出てきたばかりの「小さなアルニ」や、負けん気は強いが、言動の首尾一貫しない「縮れ毛のジョニー」、アナボトルの働きに不満なジャワのボスをなだめる年長者、「オム・サルス」の行動を、一つひとつ丹念に追っていきます。彼らの一見不合理な行動を理解しようとする、森田さんの民族誌家としての姿勢は感動的とも言えます。ほとんどが「失敗」とも言えるアナボトルたちの努力の中で、時折現れる「未来」「希望」の見える瞬間を森田さんはすくいあげようとしているのです。とり分け、論文の最後に描かれる、くじ引きに熱中するアナ・ボトルの一見非合理的あるいは異様な行動を、説得的に分析する箇所はたいへんに印象的です。

クリフォードギアツという人類学者が、かつて、「人類学とは、経験に遠い概念---理論と言っていいでしょう---と経験に近い概念---民族誌と言っていいでしょう---との往復運動だ」と定義したことがあります。森田さんのこの論文は、その意味での人類学的営為に真摯にとりくんだ成果だと言えるでしょう。

以上の論文内容の検討に基づき、本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定します。